

幼なかりし〇おもかげ人（面容の幻に）思はれる人〇見し世の人の昔〇うす靄の中に〇
 なべて美し思ひだせば、どんな事も〇さと射せし光の如く（つとさし入つた光の様に追憶が閃めいた）〇
 姿そのまゝ〇戸内は暗し〇眼をとちて〇驚くばかり鮮やかに〇風の如く〇
 趁はむすべ無み（あとを追ひかけてゆく術が無いのでとの意）〇いづこより来てはいづこへ（思ひ出してはまた忘れ）
 る、追憶の中の人や事實は何處から來〇今は涙も〇泣けばやゝこゝろ慰む〇泣け
 て何處へ去るのかわからぬといふ意
 ど笑へど

「中十日」といふ言ひ
 かたがおもしろい。

過去を煙の如きものと
 見てすてた意「二

あはれなる胸は十とせの中十日（とをか）おもひいづるに高く鳴
 るかな
 奥謝野晶子

かへりみれば煙のごとく従ひぬしりへにすてし二十三

十三年といふ結句
 が一首に男らしい響
 を與へて居る。〇
 おつとりした若い日
 の心持が出て居る。
 おもひでのほのかに
 なつたのを、寂しむ

◎戀 愛

年 平野萬里
 いかならむ夢を見しやと逢へばまづとひしくせなどい
 まなつかしき 前田夕暮
 遠き世へうつりゆくごとおもひでのやゝに薄るゝ日の
 寂しけれ 金子薫園

語彙

〇初戀（はつこひ）〇うちいで（言ひ出）〇切なる思ひ（おもひ）〇逢ひ見れば（互にあへ）
 はま（はま）〇忍びしこゝろ〇思はれ思ふ日となりぬ（二人相思の日となつたの意）〇思ふ子（戀人の）〇
 この幸（さいはひ）を〇見そなはせ神〇誰が罪ぞ〇忘れたまふな〇また戀はせじ〇二

人を戀ひてなること ○涙せし日の○隔てられて○戀はかなし○戀も古りにき○泣かぬ心に○憂き人いつら○夢とのみ○そむきて泣きぬ顔をそむけて○悔おほき身よ○疑は○若き命の○矜を得たり戀の勝利者と ○いつとなくいつか別れきいつとなく互に思ひの ○恨みじものを恨むまいもの義 ○身は老いぬ○追憶ばかり○戀歌人人を戀を戀 ○戀の日記日記をいふ ○戀文こひぶ書 ○戀ごゝろ○戀ごろも 戀の香に染みたる衣 ○匂ふ頬頬美しい頬だ ○黒髪の香の○握手す○口づけ吻 ○第二の戀二度目に ○中年の戀理性的の勝つた戀 現實的の戀 涙を戀の表象と觀たのだ。

人とわれとつなぐ涙の見えずあらば狂ひはつべき世にもあるべし

窪田 空穂

舊く言ひ得なかつた 戀心を今初めて人に うちあげたといふの であらう。 けふの後忘れ給ふ や」といふ此の戀場 や」といふ此の戀場 合に對する君の解決 を求めてそれらに 未と云ふだらう。 未來は後迄の意。 自分に身をおもふ餘 ば居れど人を思つて 就しなかるること成 言つた。 謂ふ所の口さきばか りの戀はしないといふ 意

いま初めて心さゝげて君戀ふと古き思を無みしいひう
る 水野 葉舟
けふのち忘れたまふや盡未來戀ふやわれ云ふ二様に
居む 與謝野 晶子
君おもふしかはあれども我おもふこのおもひより戀は
やぶるゝ 吉 井 勇
世の常の口にのぼせてかはらじといふごとき戀いまだ
爲さうり 平野 萬里
あひおもひ幾百年か經にけらし昨日ぞ君を見しこゝち

世のなべての若人が
持つ青春の時代に會
して自分も君を戀し
たのであるが、今は
その戀も破れて悲し
いと意。
戀人を懷かしんだの
である。

かよわい女心のやる
せなさをとめて平
靜に装うてゐる處に
悲哀がある。
わが戀の信仰の表象
を銀の十字架に擬し

せぬ

われ悲しすべての人の性をもつうらわかき日に君を戀
して

尾上 柴舟

前田 夕暮

塵あびて街のちまたにまよふ子等何等ちひさきわれ君
を戀ふ

若山 牧水

君をおもひ親をはなれてさびしくもうら若うひとり住
みなれにける

武山 英子

わが戀は君が黒衣の胸に照る銀十字架のごとし叔父

たのである。呼びか
けられた叔父なる
人は牧師であらう。
かよわい、しをらし
い人のさま。

上

今日の雨に紅殻いろの塗の戸の内をめぐりかき
らむ

土岐 哀果

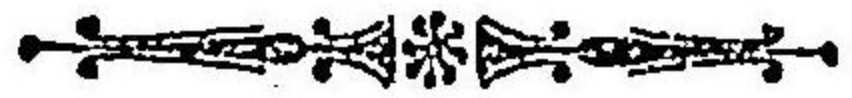
金子 薫園

—了—

明治四十五年四月二十日印刷
明治四十五年四月二十日發行

(定價金六拾錢)

不許複製



著作者 金子薰園

發行者 佐藤義亮

印刷者 小川德三郎

東京麹町區飯田町
三丁目二十五番地

東京小石川區
久堅町百八番地

(所刷印館文博)

發行所

東京麹町區飯田町
三丁目二十五番地

新潮社

總發行所 東京(丸の内區)二丁目三番地
支店 東京(丸の内區)二丁目三番地

金子薫園著

山河

初版賣切
再版出來

瀟洒清麗、稀有の美本
—— 定價四十錢 ——
—— 郵税金四錢 ——

著者が自然を詠ぜる歌は吾が歌壇の誇るに足るべき所得なり。本書は其の最も新しく醇なる所得を擧げて一卷となせるもの。何人も自然を愛するが如く、亦本書を愛誦せよ。

批評一斑

▲萬朝報評 若き日の情熱を葬りて、靜かに覺めたる心を以て青き山河を見んとする著者の態度には獨得の世界あり。▲早稻田文學評 疲れた心にしみて來る自然の淋しい快さが主として歌はれてゐる所に最も鮮かな特色がある。▲文章世界評 あやかな詩、清らかな詩、斯うした詩の領土には、氏は誇るべきものを持つて居る。▲東京朝日新聞評 何れも瀟洒溫健、流石に一部の歌人の木鐸として立派なもので、苟も歌に志あらんものには必讀の書であらう。▲報知新聞評 自然に對して一貫せる敬虔なる著者の態度は本集に於いて一層鮮明に深厚に表示せらる。

▲無限の需要 九版又々賣切、第十版發賣

和歌入門

金子薫園著

定價參拾錢 郵税四錢

▲此書は奈何にしたらば、初學者に歌の詠み口が付くであらうと苦心して、極めて學實に極めて平易に、さながら手を執つて教ふるやうに解き示したものである。(中央公論評)

▲若し此書を讀んで和歌一首でも作り能はぬやうな人があらば、それは奈何なる書を讀むとも遂に歌の詠めぬ無能の人也。要するに本書は初學者座右の寶典也。(中央新聞評)

和歌練習法

金子薫園著

近刊——目下印刷中

内容の練習と、形式の練習と相俟つて、自然に佳作秀歌を得べき徑路を實例に就いて會得せしむ。著者多年の學實なる研究の下に成り、斯道研究者の耳目を新にす、彼の練習を奨めて練習法を説かざるが如き矛盾は、本書の出づると共に、遺憾なく一掃せらる可き也。

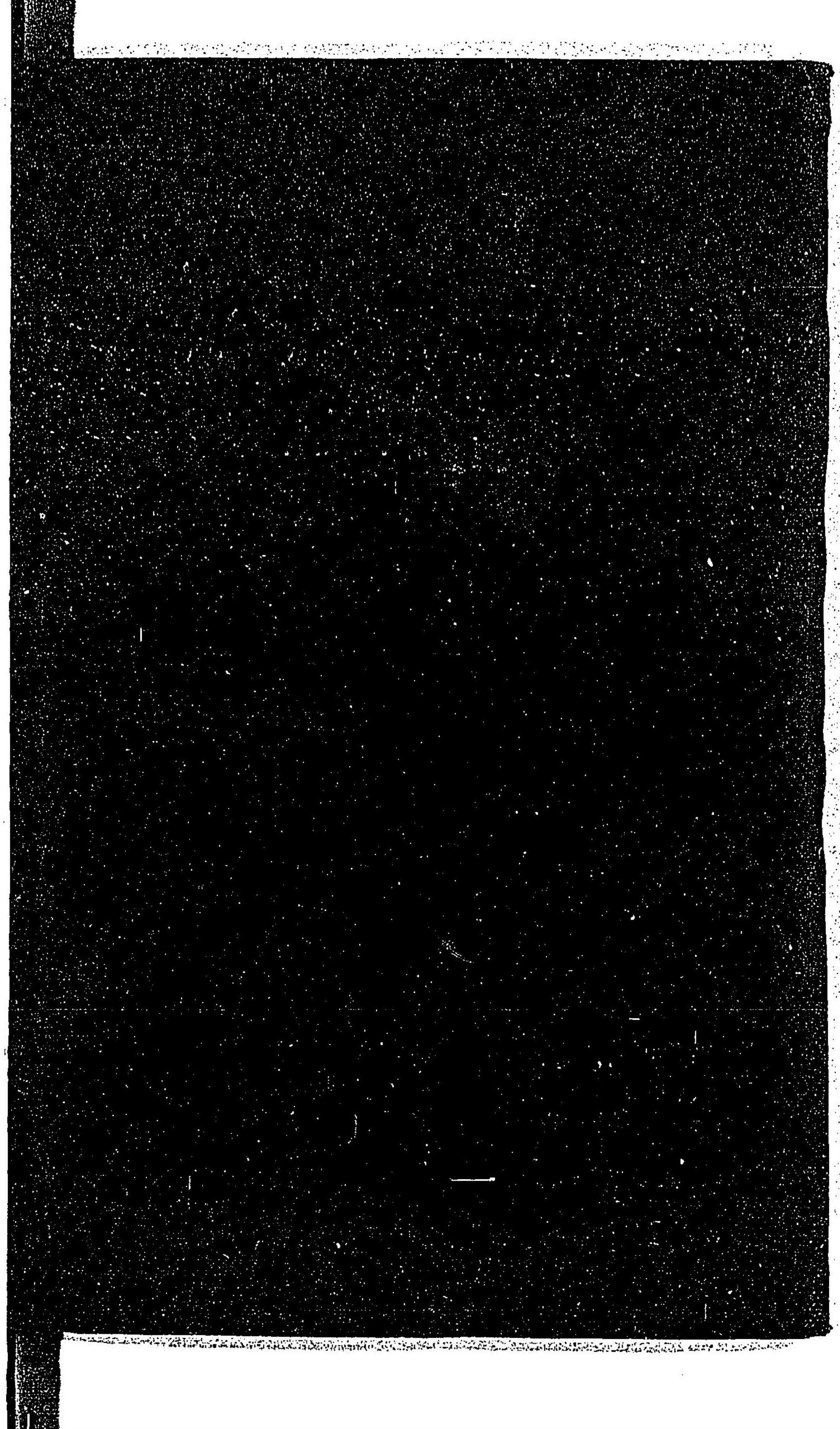
作文叢書

全部十二冊、第八編迄發刊
 定價一冊金參拾錢づつ
 △郵税一冊金六錢づつ

實切又易切、每篇形を重ねざるなく、中に十五版に及べるとあり。作文書類の發刊多きも、好評斯くの如きは、未だ他に見ざる所。以て内容の眞價値を斷するの證左とすべき也。

- ◎第一編 新書簡文 ▼第十五版 ▲金子薰園著
- ◎第二編 小品文範 ▼第六版 ▲松原至文編
- ◎第三編 日記新文範 ▼第七版 ▲小林愛雄編
- ◎第四編 書簡文捷徑 ▼第六版 ▲金子薰園著
- ◎第五編 新叙景文範 ▼第四版 ▲生田長江編
- ◎第六編 論文作法 ▼第二版 ▲相馬御風著
- ◎第七編 會話文範 ▼第三版 ▲徳田秋聲編
- ◎第八編 新叙情文範 ▼最新刊 ▲水野葉舟編

270
220





301340-001-9

特71-757

作歌新辞典

金子薰園 / 著

M45.5

DBC-0001

